

利用形態からみた公開空地の類型と評価に関する研究(その1)

正会員○ 望月 大輔*³
同 若山 滋 *¹
同 松村 秀弦 *²
同 田中 理嗣*³
同 夏目 欣昇*³

【序】 建築敷地の共同大型化の促進及び、市街地環境の整備改善を目的とする総合設計制度に基づいて設けられた公開空地は、利用形態、空地のまとまり及びその開放性によって定義されているが、評価にあたる有効係数の基準は面積、幅等の量的な基準が主で、実際の使われ方や景観、環境の面での評価はされていない。またその基準がほぼ全国一律なものであるのに対し、周囲の実状に応じたきめ細かな空地の有効度が問題にされ始めている。

これまでの研究においては都心に位置する各公開空地をその利用方法や心理実験を空間構成要素と絡めることよっての評価はなされてきたが、実際の利用を基にした総合的な評価方法や周囲の実状に応じた評価に関する研究は見られず、これに関する基礎的資料もいまだ十分ではない。

本研究では、名古屋市をケーススタディとして市域全体における公開空地の利用形態と知覚要素といった実際の利用に関する資料を収集し、その利用形態にあった設計や評価に関する具体的な基準項目を得ることを目的としている。

【研究の構成】 図-1で示すように本編で利用状況とその利用者の知覚内容から公開空地の現状を明らかにし、第二編において建築用途や周囲の人の流れにより都市的性格類型を行い、利用や知覚との相関を明らかにする。さらに第三編では公開空地の都市的な役割、効用を求め、それを基に設計・評価基準を体系化し、提示する。

【研究の対象】 名古屋市に認可された91計画の中から、公共空間、私有空間と公開空地の関係よりグルーピングを行い、偏りがないようにその代表的な公開空地を抽出する一方、特殊ながら今後増えると思われる公開空地(店舗建築に付属している、建築内部に存在する、超高層に付属している)を含む23空地を抽出して詳細な研究対象とする(表-1)。

【調査・実験方法】 利用調査と知覚実験は都心、住宅地の時間的な特殊性を避け共時的な考察を行うために、特別なイベント時や建物への出入りの激しい時間帯を避け、都市活動の平常的な時間帯(正午から13時を除く10時から16時30分にかけて実施)の15分間に行う。利用調査は調査員が現地へ赴き、利用形態別の人数及び、利用場所を調べる。知覚実験は被験者13名に対象地を体験してもらい、その際知覚する空間要素と感覚を自由に実験用紙に記入してもらう。

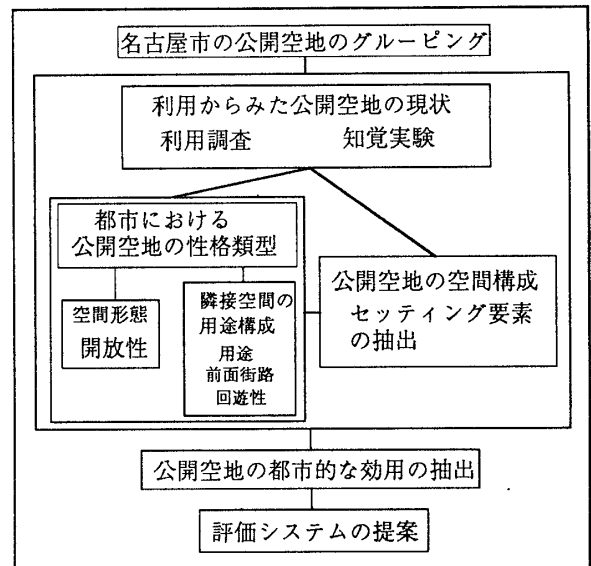


図-1 研究フローチャート

表-1 詳細な研究対象の公開空地

公開空地名	記号	公開空地名	記号
市営黒石荘棟間部	Aa	アネックスビル	F
市営黒石荘プレイロット	Ab	市営土原荘	G
第三堀内ビル1階ピロティ	Ba	中電工事本社ビル	H
第三堀内ビル西部	Bb	シティコーポ植田北部	Ia
日土地名古屋ビル地下	Ca	シティコーポ植田棟間部	Ib
日土地名古屋ビル1階ピロティ	Cb	中区役所・朝日生命共同ビル	J
日土地名古屋ビル2階屋上	Cc	ザ・シーン徳川	K
名古屋国際センタービル	Da	NHK名古屋放送センタービル	La
桜通り前面		1階アトリウム	
名古屋国際センタービル		NHK名古屋放送センタービル	Lb
北東部	Db	地下2階	
名古屋国際センタービル		南大津ビル1階	Ma
2階屋上	Dc	南大津ビル地下	Mb
パークシティ鳥見	E	三井海上火災ビル	N

A study on types and evaluations of public open space from view point of utilization forms (part 1)

【公開空地の利用形態】 公開空地を利用する行為を、仕事や建物利用のために利用者の意志とは関係なく利用する『必要行為』、利用者が街路空間の空間や装置の不足を補うために公開空地の装置を利用する『任意行為』、空地内の装置や空地で人とふれあうことを目的として利用する『ふれあい行為』の3行為に分類し、その人数を集計した(表-2)。任意行為とは通行利用行為や建物内情報を得る行為、立ち止まる、座る(一人でたずんでおり、ふれあい行為は生まれていない)行為のことであり、公共空間利用の補完的な行為として位置づけられる。また、ふれあい行為は会話をしたり、展示物やモニターを見たり飲食や装置への参加をする行為のことで空地の独自な行為として位置づけられる。

集計結果からみると空地を最も利用するのは建物利用を主とした必要行為であり、この利用を除くとほとんど利用されない空地は、公共的な役割を果たしていないことを意味している。つまり任意行為とふれあい行為は空地の公共利用の指標となるものと思われる。

公開空地の利用からみた都市的な効用は、通り抜け利用を中心に任意行為の利用度が高い空地が多いことから、街路空間を補完している程度であると言える。

【公開空地における知覚】 実験結果から公開空地の知覚内容は、図-2に示すように人間が感じる知覚要素とその知覚対象を基にKJ法的に分類した。空間全体を対象とした規模、開放性、圧迫感に関する知覚が、

また植栽といった自然物や人工的な水景物、パブリックアートといった空間を象徴させる付帯物、そして利用している人の動きが知覚されており、これらは空地の知覚を構成する基本的な要素であるといえる。一方、環境の面では明かりや音が知覚に影響を及ぼす要素として重要であること、建築用途との関係ではガラ

ス壁面、ベランダ壁面を通して建築用途との連続性に関する知覚があることが明らかになった。特に「都心の割にしては」というように周囲の都市的な性格と照らし合わせた知覚があることが注目される。総じて開放的で広い空地に好印象が持たれているが、単調な空間よりも変化のある空間や、有機的な空間に魅力が感じられている。特に植栽は、現状では同じような植栽が整然として置かれており、その量もさることながら、手入れの良否、自然的な植栽が重要であることが明らかになった。

表-2 利用形態・人数集計

利用形態	公開空地(利用者数は15分当たりの人数)													
	Aa	Ab	Ba	Bb	Ca	Cb	Cc	Da	Db	Dc	E	F		
必要行為	通行 建物利用	6	0	58	52	128	146	2	36	0	5	36	258	
	滞留 仕事	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	3	2	
任意行為	通行 歩道型歩行	0	0	43	0	0	1	0	17	0	0	4	0	
	通行 通り抜け	3	4	0	12	183	170	0	32	2	0	5	40	
	滞留 座る	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	7	
	滞留 立ち止る	0	0	2	0	0	1	0	3	0	0	1	0	
	滞留 広告物等を視る	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	5	
ふれあい行為	滞留 会話	10	0	0	0	3	10	0	0	0	2	8	0	
	滞留 展示物を視る	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	23	
	滞留 飲食	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	8	
	滞留 商業行為	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	
	滞留 参加	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	31	
	G	H	Ia	Ib	J	K	La	Lb	Ma	Mb	N			
必要行為	通行 建物利用	5	4	2	3	185	15	263	90	84	12	25		
	滞留 仕事	0	0	1	0	0	0	2	0	2	0	1		
任意行為	通行 歩道型歩行	0	0	2	0	4	0	0	0	77	0	3		
	通行 通り抜け	0	0	0	0	46	5	34	3	57	0	9		
	滞留 座る	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0		
	滞留 立ち止る	0	1	0	0	0	0	23	0	7	0	0		
	滞留 広告物等を視る	0	0	0	0	2	0	11	0	4	3	0		
ふれあい行為	滞留 会話	0	0	0	0	0	0	27	10	15	0	0		
	滞留 展示物を視る	0	0	0	0	0	0	37	0	8	0	0		
	滞留 飲食	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0		
	滞留 商業行為	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	滞留 参加	3	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0		

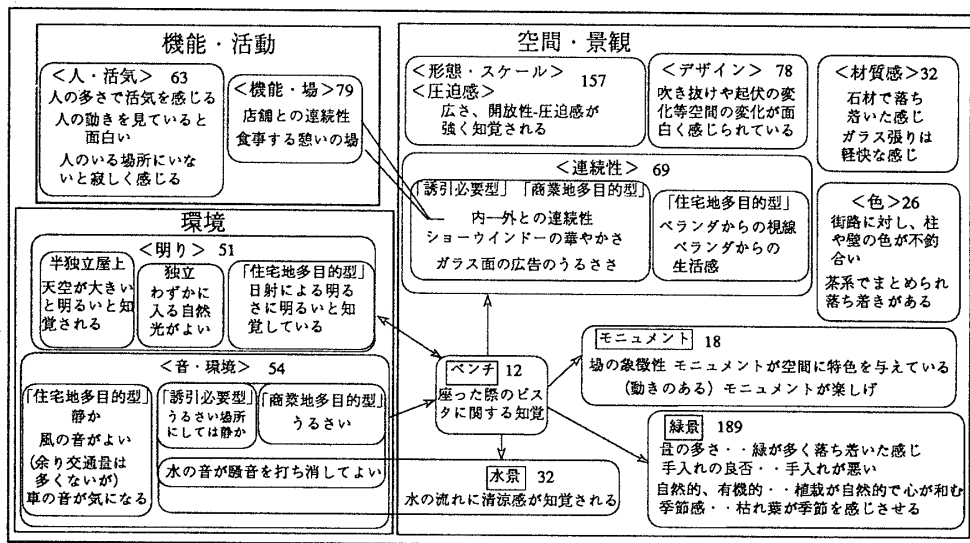


図-2 知覚要素相関図

*1名古屋工業大学教授・博士 *2住宅都市整備公団・修士 *3名古屋工業大学大学院